

なごし はらえ
夏越の祓

第1話



— しょっぱいショートケーキを食べた日 —

志間 悟

Graphic : ONAKA

.....
*It seems it's written
 But we can't read between the line
 Hush, it's OK
 Dry your eye*

*Dry your eye
 Soulmate Dry your eye
 Dry your eye
 Soulmate Dry your eye
 'cause soulmate never die*

PLACEBO 『Sleeping With Ghosts』より

*Whatever comes of you and me
 I love to leave my memories with you*

QUEEN 『Now I'm Here』より

信号待ち。フロントガラスの向こうは春めく快晴。カーラ
 ジオから流れだしたのはカーディガンズの軽快なリズム。

「懐かしいよね、この曲……。知ってる？」

ハンドルに両腕をもたれかけ、左にいる遙佳はるかに尋ねた。

遙佳はマントヒヒの縫いぐるみをもてあそびながら、記憶
 をたどっているのか眉をしかめるような表情をした。マント
 ヒヒの縫いぐるみは、遙佳と同じ誕生日、五月十八日生まれ
 設定でチークスという名前が付けられていた。ぼくが遙佳に
 プレゼントしたものだ、異常にカラフルなお尻でちつとも
 可愛くないものだから、ぼくの車に置きっぱなしにされてい
 た。

「何だっけ？ 昔、テレビの番組で使ってたよね？ ナイナ
 イ司会の……。」と、遙佳は自分のおでこにチークスのおでこ
 くつつけながら想い出そうとした。あるいは、チークスの
 記憶を自分の脳に吸い取ろうとする仕草であろうか？

「カーディガンズ、『マイ・フェヴァリット・ゲーム』」

と、その答えを言ったとき、信号が変わった。

右矢印が赤い停止信号の下に点り、前のトラックがずるつ
 と右折を始めた。ブレーキからアクセルに足をのせかえる。
 ちなみに、ぼくの車は中古のシビックで、軽やかなエンジンの
 感じが結構気に入っていた。

ゆっくりとした前のトラックに軽くいらつきながら、ぼく

はハンドルを右に……。

右折して一キロメートルも行けば、二人の予約した結婚式場があった。

結婚式は夏に予定していた。この日は、司会者との顔合わせから始まり、披露宴プログラムの確定までをしなければならぬ。面倒に思う反面、具体化する二人のセレモニーに、浮かれるような気持ちも、確かにあった。

ゆっくりとハンドルをきって、トラックにつづいて右折を始めたとき――。

フロントガラスの左端に迫りくる白い物体が見えたような気がする。つづいてカーデイガンズを掻きけすブレーキ音。憶えているのはそこまでだ。

目を開く前から、病院のベッドに寝かされていることは判っていた。

消毒液の臭いにまぎれた何かの花の香り。周囲の奇妙な静けさ。鈍痛だけで、動かない身体のそこかしこ。

誰かが付き添ってくれているらしいことも、何となく判っていた。母だろうか。

トイレにでも立ったのか、その気配がなくなったときを見計らって目を開いた。

よかった。両眼は無事らしい。まぶしさにちよつとシバシ

バしたけれど。

首は動かない。瞳を巡らし、左、窓際にある紅やピンクのカーネーションを見つけた。そうか、カーネーションの香りだったのか。

部屋の内装は全体的に薄茶色のおちついた感じ。窓の反対側、右には仮眠ができそうなソファ。足下に扉。個室だった。その扉が開いて、母が入ってきた。看病疲れか目の下にくま、顔入れもすぐれないように見えた。

「ゆ・う・す・け……」瞳を見開いて言った「目が覚めたの？」

ゆうすけ、漢字でかくと「祐介」、ぼくの名前だ。

「やあ……」

よかった、声も出る。

母が一気に泣き出した。見開いた瞳から大粒の涙がこぼれた。

あとで聞いたことだが、ぼくはまるまる三日間も意識が戻らなかったのだ。

「やあ……」という目覚めの挨拶の次に、ぼくが口にしたのが――

「遙佳は……？」という問だった。まるで独り言のように、ほとんど無意識のうちに発していた。そして、口にしたあと、

その言葉の重みに気がついた。『遙佳は……?』の重さは、母が返事に窮して黙り込んでいるその時間の二乗に比例して、加速度的に増加し、ぼくの壊れたからだをベッドに深くめり込ませていった。

「……亡くなったわ」

母はさらに声上げて泣き続けた。

ぼくが意識を取り戻したことをよろこぶ涙であつたはずなのに、ほんの数秒後には、遙佳を失った悲しみの涙にかわってしまったのだ。母は遙佳を気に入っていた。遙佳を両親に紹介したとき、ぼくが生まれたあと、もうひとり、できれば娘がほしかったのだと、母がうちあげた。残念ながらふたり目は授からず、無口で気むずかしい父と、何を考えているのか全くわからない息子（ぼく）の間で、いつも寂しい思いをし、娘がいたらどれだけ気持ちほぐれるかと、ことあるたびに授からなかった娘のことを想ったそうだ。「女の味方ができて嬉しい」、母はそう遙佳に言った。遙佳も同居を承諾してくれた。ふたりの間には嫁／姑の確執など起こりえないように思えた。

母はぼくらの結婚を、ほんとうに待ち望んでいた。

ついに母は、その場にへたり込んで泣き続けた。

ぼくは、不思議と涙が出なかった。

目が覚めた翌日から、ぼくはいろんな人の訪問を受けた。

「面会謝絶」が解かれたということだった。

年齢はぼくと同じくらい。スーツに黒縁眼鏡の保険会社社員が事故の様子を説明してくれた。

ぼくはベッドに仰臥したまま、その説明を聴いた。

黒縁眼鏡は、相手の家族やぼくの両親や、そしておそらく遙佳の両親にも、何度も説明したのでろう。説明はよどみなく、その黒縁眼鏡のように一点の曇りもなかった。

トラックに続いて、右折しようと車を進め始めたことは憶えていた。

そこに、彼（黒縁眼鏡はちゃんと氏名を言ったが、知りたくもない）の運転していたワゴン車が信号を無視して突っ込んできた。その彼も亡くなってしまったので、推測でしかないが、脇見運転として処理されたとのこと。右折を開始していたぼくのシビックの斜め左側と彼のワゴンの前方が衝突し、互いにつかつた側を圧壊し（そう、黒縁眼鏡は「圧壊」だなんて辞書にも載ってなさそうな言葉を使ったんだ）、ぼくのシビックにはサイドエアバックは装備していなかった。助手席いた遙佳は押しつぶされ、ワゴン車の彼はフロントガラスを突きやぶって、ぼくのシビックを越えて車道に叩きつけられ、ぼくは右折ラインの白線部分に腹を見せて転がったシビックの中で、ぐちゃぐちゃになっていた。

遙佳とワゴン車の彼は即死だったそうだ。

鉄の塊と化したシビックから救出されたぼくは救急病院に搬送され、折れた鎖骨と肋骨、腰骨の固定と、むち打ち状態の頸椎やつぶれた肺や腎臓の応急治療のほか、脳内出血の検査まで、手篤く処置されたのだそうだ。

そう、黒縁眼鏡はワゴンの彼の方の保険屋さんであって、被害に遭ったぼくが「手篤く処置された」ということが一番強調したいところだったのだ。

つまり、ぼくの治療費はワゴンの彼の保険から支払われているのだ。

このあと、黒縁眼鏡の説明は、死亡した遙佳の両親に支払われた「対人無制限」云々の話になったが、ぼくはもう聴いていられなかった。聴いているふりをしているだけだった。耳から脳に情報が伝えられるそばから、脳がその情報を拒んでデリートしていくのだ。

そもそも人の存在がお金に換算できるはずがなからう。

それを知っていて、逐一報告説明するしかない黒縁眼鏡も、損な役回りだと思った。ぼくだったら、彼の仕事はできない。

黒縁眼鏡は一通り説明を済ませると、ベッドに横たわったぼくに、深々と頭を下げて帰っていった。

黙って付き合っていた母が、言った。

「あなたが気を失っている間に、次から次ぎへと目まぐるし

いくらい色々あったのよ」

母は、ぼくの分と自分の湯飲みにもお茶を入れながら、補足説明を始めた。

ぼくはベッドのスイッチを入れて、上半身を起こした。

「今の人、家にも来て説明して、あなたが死んでしまった場合にこうだとか、一命を取り留めた場合はこうだとか……。さっきの人が言ったように、あなたの入院治療費として保険から支払われる額には上限があるんだけど、心配しないでね。でも、早く良くなって退院してよね。余計なお金は出したくないし」

って、どっちなんだよ。こっちは突っ込みを入れる元気すらないのに。

ぼくは、ストローのささった湯飲みに手を伸ばして、お茶を飲んだ。不思議と両腕、両肩は無傷だった。両鎖骨が折れたことと、頸椎を痛めたので、首と頭は固定されていたから、顎を上げて首を反らすことができず、ストローで飲むはめになっている。もつともそれは、ぼくが介護用の薬吞器や専用のポッドで飲むのをいやがったせいなのだけれども。

「あと、車は廃車。廃車処分した業者さんから、段ボールが届いていたわよ。車内にあった私物ですって」

事故を起こした当人も死んでしまったし、恨みをぶつける対象がないことが歯がゆい。

面会時間が終わろうかという夕方、ワゴン車の彼の「身内の者」という人が謝罪に来た。そう、彼にも家族がいたのだ。赤ん坊を抱いていた。彼の奥さんであった。

彼女は血の気の失せた白い顔をしていた。窓から射しこむ夕日で暖色系の色合いを帯びていたけれども、疲れ切っていることは明白だった。

「なんともお詫びのしようのないことですが……」と彼女は切り出した。

彼の身内と聞いても、憎しみは沸いてこなかった。だってそうだろう。赤ん坊を抱いてくるなんて、ずるいじゃないか。赤ん坊は始終おとなしく抱かれていて、くりつとした瞳をせわしなく動かし、ぼくと目があうと「ばふー」っと声をあげて、手を振ってくれたりしたんだ。やられた。

彼女が帰ってから、母が教えてくれた。以前にも一度見舞い（というか謝罪）に病院を訪れたことがあって、そのとき、興味本位に母が聞き出したのだ。彼女は三十五歳で、ようやく授かった赤ん坊（男の子）で――、
事故はみんなを不幸にする。

次の日には父が来た、頼んであったCDウォークマンとポストンバックに入るだけのCDを持って。わがままを言って、

ぼくのアパートに寄ってCDラックから取って来てもらったのだ。正直、父が来てくれたことよりも音楽が聴けるようになったことが嬉しかった。ロック・ミュージックはぼくにあって何よりの薬だ。「現実逃避」？ いやいや「こころの薬」。

父との会話はわずかだった。

「どうだ？」と父

「『どうだ？』って？」

「『どう』も『こう』もないか？」

「ご覧の有様だよ」

「生きてれば御の字だぞ」

そうは思えなかったが――「うん」と肯定。

父は寂しげな笑みを浮かべると、あとは何も言わずに帰った。いつもは薄毛を気にして、きれいなでつけているのに今日はそんな余裕もなかったのか、整髪料もつけずにさっいた感じだった。初めて見る父の表情だった。たぶん、言いたいことは他にもたくさんあったのだろう。それを呑み込んで、寂しい笑顔に代えたのだ……。やるせない気持ちが増した。

さっそくCDの山をかき分けて、メタリカ一枚を取り出した。こういうときにはメタリカだ、ぼくの場合。



目が覚めて三日目、一番会いたくなかった人たちが花束とフルーツを持って訪れた。

ふたりが来ることは知らされていた。できれば逃げ出したかったけれど、なかばベッドに縛りつけられた状態、逃げも隠れもできやしない。

遙佳のご両親。ふたりは一気に老け込んでしまったようだった。

ふたりはソファに腰掛け、母は気を利かせたのか、花と花瓶をもって退出した。

「意識が戻ったって聞いて、跳んできたのよ」

「ありがとうございます」

「ひどい状態だったんだぞ、祐介くん。真一郎なんかは『祐介がべっちゃんこになった』って言ってたんだ」

「真一郎というのは、遙佳のお兄さん。」

「気丈に明るく話す、ふたりが痛ましい。」

「すみません、ぼくがもっと注意していれば……」

「何を言うの！」

「保険の担当者が説明してくれたよ。この事故は相手方に百パーセントの責任があるってね。祐介くんは避けようがなかった」

「……道を間違えたんです。曲がるはずだった交差点を通り過ぎて、入った道で事故にあったんです。だから、ぼくにも

責任が……」

「それは考えすぎよ、祐介さん」

「そうだよ。『もし、あのときこうしていれば』という話ならば、私らにも責任がある。あの式場でOKを出していなければ、君も遙佳もその道を通らなかつただろう」

「あなたに罪はないのよ。そんなことを言ったら、遙佳が悲しむわ」

遙佳が悲しむ……。

義母になるはずだったその人の言葉が、ずいぶんと胸に堪えた。

・ () ・

初めて遙佳に出会ったのは、千駄ヶ谷のカフェだった。

五年も前の、ぼくが二十五歳、遙佳が二十三歳のときだ。

梅雨のあけた七月中旬の土曜日、陽が沈み、夕闇があたりを支配し始めた頃、ぼくは千駄ヶ谷の駅を降りた。

「駅正面の道を道なりまっすぐ。鳥居のある交差点を右折。

銭湯まで行っちゃったら行き過ぎ」。阿久津——会社の同僚、悪友の阿久津——の指示通り歩いた。店は地階にあったが、すぐに見つかった。

『ブリティッシュ・アンダーグラウンド』と題されたイ

ベントで、数名のDJがブリティッシュ・ロックを新旧取りまぜ流しまくるといふ、来る者拒まずのオープン・パーティーだった。阿久津がそのカフェの常連で、洋楽好きのぼくを誘った、と言うわけだ。

階段を降りていくと、入り口にスタッフがいて、入場料と引き替えに一枚のドリンクチケットを手渡し、左手の甲にスタンプを押してくれた。途中退出OK、このスタンプを提示すれば何度でも入店できる、ということらしかった。

扉を開けたとたんに、プラシーボの物憂げなアルペジオが耳に飛び込んできた。店内を見回した。さほど広くない店内に、腰ほどの丸テーブルが数脚。立食スタイルだ。客はまだ少なく半数以上のテーブルが空だった。ほの暗い照明の下、正面の大型スクリーンが目立っていた。スクリーンには、ジーンズのみで上半身裸の男性が幽霊のように半透明なヌード女性の腰を抱くプラシーボのCDジャケットが映し出されていた。スクリーンの横——というか部屋の隅——に小さなミキサー卓があつて、ひげ面ジャージ姿の男がヘッドホンをかぶり、なにやら操作していた。

阿久津を探したが、見つからない。

代わりに、ドリンク・バーを横手奥に見つけた。

入場料にワン||ドリンクの料金が含まれていた。もらったばかりのドリンクチケットを手に、バー・カウンターに向か

った。

カウンターの向こうには双子の姉妹がいた。声を揃えて「いらっしやいませ」と迎えてくれた。エプロン姿の似合う可愛い系の姉妹だ。阿久津がこのカフェに入り浸る理由が判ったような気がした。

カウンターにあったメニュー表を見て、なにを注文しようか迷っていると、

「岡田先輩」と声を掛けられた。岡田というのは、ぼくの名字だ。

懐かしい呼び方に驚いて振り返った。

アーミー柄のタンクトップを着た女の子がいた。

「ああ、やっぱり！」

軽音楽サークルの後輩だ。が、名前が思い出せない。

「えっと……」

「並木ですよ。忘れちゃったんですか？」

「ごめん。チャージングな顔は覚えていたんだけど、名前が出てこなかったんだ」社会人になるとお世辞が上手くなるのだ。続けて人差し指を立てて「ベース、弾いてた」

「その通り！」

ベースを弾いていたこと、それにチャージングな顔立ちであること、両方とも正解だ、と言いたいのだろう、たぶん。

結局無難なジントニックをもらおうと、並木に誘われるまま

テーブルについた。そこに、もうひとり女性がいた。

「紹介するね。川野遙佳さん」

並木のアーミー柄とは対照的な、シンプルで目立たない（ああ、清楚っていうのか）白いノースリーブを着た女の子——遙佳——だった。

直後に阿久津が合流した。阿久津は得意の軟派な会話を駆使し、女性ふたりの近況を聞き出した。

並木も遙佳も二十三歳の同い年で、大学卒業後エステシヤンの専門学校に通い直しているということ。遙佳は音楽学校を卒業していて、ヴァイオリンを弾くということ。並木の知り合いのDJが今晚出演すること。などなど。

突き詰めるとそこには、女子の就職難というシビアな現代世相があるわけだけでも、阿久津もぼくも、そこはさらりと流した。話に詰まれば、流れているロックのネタをふれば良いのだから、会話の接ぎ穂が見つからないといことは、なかった。まあまあ盛り上がったのかな。お互いに連絡先を交換し、その日は解散した。

次の月曜日、阿久津に昼飯をおごらせた。もちろん。

当時、ぼくには特定の女友達はいなかった。大学卒業ともになんとなく付き合っていた女の子にふられ（「はつきり

しない男って、もういやなの」って、あっさり、「彼女ない歴」二年。別に焦っていたわけでは決してないのだけれど、遙佳のことがちよつとばかり気になったのは本当だ。

結局、阿久津はカフェの双子の片方にご執心のようだし、並木は知り合いのDJとやらと付き合っているらしいし、ぼくが遙佳にこっそり連絡を取っても、誰もとがめたりしないであろう状況ではあったのだ。

最初はメールの交換から、その後CDの貸し借りや、時間のあるときに食事に誘ったり、小さなライブハウスにライブを観にいったりして……。よくあるパターンだ。

どこにでも居そうなカップルになったのだ、ぼくらは。付き合い始めて二年目、遙佳はエステシヤンの専門学校を卒業し、青山のエステサロンに就職。ふたりとも社会人になって、すこし付き合い方のスタンスが変わったかもしれないけれども、「どこにでも居そうなカップル」には違いなかった。

結婚を意識したのはいつ頃からか？ たぶん遙佳は、ずいぶん前から意識していたと思う。ぼくが、結婚を切り出さなかったから、就職したのかも知れない。けれど、遙佳は『はつきりしない男って、もういやなの』とは言わなかったのだ。ぼくは、そんな遙佳が愛おしかった。

会社内での自分のポジションが見え、将来のビジョンが描

けるようになった三十歳目前のある日、ぼくは遙佳と結婚しようと思った。具体的な日付などは記憶していないが、そんなタイミングだ。ぼくは給料三ヶ月分の貯金を下ろした。指のサイズはどうにリサーチ済み。マニュアルどうりだった？ そういう世代なんだよ。

遙佳のローテーションに合わせて天王洲のレストランを予約した。十月第一週目の木曜日だった。席に案内されると、七色に輝くお台場の観覧車が望める絶好のポジション。遙佳は高級レストランで食事ということで余所行きシツクなワンピース。ぼくもクリーニングしたばかりの折り目がばりっと出たスーツ。たぶん、遙佳は気がついていたんじゃないかな。少なくとも期待していたかも、ぼくがプロポーズすることを。でも食事中は言い出せなくて、ちよつと歩こうかってことになったんだ。運河に挟まれた公園だった。周囲のビル光や、公園に架かる橋に点いたライトで意外に明るかった。

ふたりとも手すりを持ってもたれかかり、揺れる運河の水面を見ていた。

ぼくは給料三ヶ月分の物を鞆から取り出し言った。

「これ、渡さない」と

「時季外れのプレゼントね。クリスマスにしてはまだ早いし」

「プレゼントとはちよつとちがうかも……」

遙佳の手にブルガリの小箱を乗せて言った。小箱には薔薇を模した赤いリボンが付いていた。

「『契約の品』とでも言うのかな」

「けいやくのしな？」

「開けてみて」

遙佳は箱を開けようとはしなかった。両手で包み込むように小さな箱を握っていた。

「指輪だよ。気に入ってくれるかな？」

小箱を見たまま、遙佳は無言だ。しようがないので言い継いだ。

「結婚して下さい」

遙佳は、小箱から瞳をあげ、まっすぐぼくを見た。水面みなもに反射した光がたゆたい揺らぎ、遙佳の頬を鼻梁を、そして唇をなぞる。

「はい」

遙佳が答えた。

お互い、家族には紹介済みであった。ぼくは遙佳の家に招かれたときに、遙佳の弾くヴァイオリンをご両親と一緒に聴いたし、お兄さんの真一郎さんとご両親の四人で麻雀を打ったことも何度かあった（遙佳は麻雀ができない、ぼくを入れると面子が四人揃うのだ）。もちろん、自分の家に遙佳を呼

んだこともあった。母が「一度連れてこい」ってうるさく言うものだから。

プロポーズしたことを話すと、「やっとその気になったか」と安堵された。つきあって五年にもなれば、そうなのだろう。遙佳の方も同様だったらしい。いや、女性で二十八歳ともなれば、「やっと」という思いはいっそうだったかもしれない。

ずいぶんと待たせたプロポーズだったのだ。

・ ~ ・

ぼくは助かった。リハビリを怠らなければ事故前とほとんど変わらない状態にまで間違いなく回復すると、医者は太鼓判を押した。しかし、遙佳を失った喪失感は絶対で、致命傷だった。骨がつながり、ダメージを受けた内臓が治癒しても、ぼくのこころは「事故前と変わらない健康な状態」には決して戻らないだろう。これはぼくが太鼓判を押す。

『あなたに罪はないのよ。そんなことを言ったら、遙佳が悲しむわ』

もう居はしない彼女がさもそこに居るかのように諭えて言った言葉が、ゆっくりと、しかし確実にこころの傷にしみ込み、じんじんと、じんじんと、痛みを發した。

続いて、いろいろな人が見舞いに来てくれた。三日に一組は見舞客が来てくれたんじゃないかな。

悪友の阿久津と会社の上司。

阿久津の第一声は「美人の看護婦さんいる？」だった。これには軽く「いるさー」と答えておいた。

上司は、ぼくの抜けた穴は関連部署からの応援もあつてなるとかなりそうだと言うこと、つまりは仕事のことには心配せずにはしっかり治せということを、言いに来たようだった。いつもは仕事丸投げの上司から、優しい言葉を聞かされるのも辛い。

幸い、有給休暇が五十日以上溜まっていた。追加の休暇を取らずに、有給休暇だけの期間で怪我を治し、出社したい。そう思った。

リハビリと接客と、そうでないときはヘッドホンでロック・ミュージックを聴いて過ごした。

看護士さんや看護婦さんとも友達になった。

あの日のことは鮮明に覚えていて。五月十八日のことだった。首のギブスがとれ、歩行器に寄りかかって独りでトイレに行けるようになっていた。軽いリハビリを始め、部屋も個室から相部屋になって二日目――。

義兄になるはずだった真一郎さんが見舞いに来てくれた。

夕食前の、リハビリで疲れた身体を落ち着かせる、ほっと一息つける時間帯。ベッドを起こし雑誌を読むともなく眺めながら、ヘッドホンでオアシスを聴いているときだった。

ベッドの横に真一郎さんが立っていた。

ヘッドホンをはずし、挨拶しようとしたら、向こうから「やあ」と言ってきた。ベッドの横にあった椅子に腰掛けると、「おとなしくしている」という感じに手のひらをこちらに向けて合図した。

ぼくは起こしたベッドから背を少し離し、軽く会釈した。

「ご無沙汰してます」

「……ほか。沙汰の渦中のやつが『ご無沙汰』はないだろうが。『ご無沙汰』っていうのは何事も取り立てて騒ぐことが無くて、連絡も入れてないようなときに使うもんだ」

「ああ……。そうですね」

「何、聴いていた？」

「オアシスです」

「ほう。いいね」

信一郎さんはブリテイッシュ・ロック派だ。遙佳にクイーンだのデイープ・パープルなど古いブリテイッシュ・ロックを仕込んだひと。オアシスも英国製だ。

「……災難だったな」

そう言うと、下げていた小箱——ひと目でケーキ屋さんのものとわかる小箱——をベッド上に渡したテーブルに置いた。

「憶えている？ 今日、なんの日でしょう？」

もちろん憶えていた。一瞬言葉につまったが、ぼくは言った。

「遙佳さんの誕生日です」

義兄さんも妹を亡くしている。こころの傷はぼくよりも深いかもしれない。ぼくは遙佳のご両親が見舞いに来てくれたときと同様に、何かとつても悔しい気持ちになった。

自分は徐々に回復してきている。けれど遙佳はもう灰になつてしまった。その仏前に行っていない自分がいて、のうのうと回復して、彼女の兄がぼくに優しく声をかけてくれる……。

この人とぼくは遙佳を介して兄と弟になれていたはずだ。だけれども、もうそれは叶わない。

何だかわからなかった。

今日は、遙佳の誕生日だ……。不意に涙があふれてきた。

抑えていた気持ちだが、思考が、感情が、一気に脳内を巡つたようだった。楽しげにヴァイオリンを弾く遙佳。わかりもしないのに麻雀の捨て杯を指示する遙佳。スパークリングワインのグラスごしに微笑む遙佳。運河の公園で小箱を大切に握る遙佳。……記憶が、想い出が押し寄せた。そして、マン

トヒヒの額に自分の額を押し当てていた遙佳。

もう、抑えられなかった。

嗚咽が止まらない。

相部屋になったばかりだったのに、恥ずかしい。声をあげて泣いていた。驚き見る周りの目は気にはなつたが、こらえられなかった。

見ると、真一郎さんも泣いていた。さすがに声は出していなかった。ぼくなぞより大人なんだな。

何も言わずに二人してひとしきり泣いた。

「……災難だった」また、真一郎さんが言った。「けれど、負けるなよ。へこんじまっている祐介なんて……、遙佳だつて見たくないはずだ」

「義兄さん……」

「『義兄さん』か。良いなその響き」

「……ぼく、初めて泣きました。今まで……何故だろう、泣けなかった」

真一郎さんは微笑んだだけで、特に何も言わなかった。それで充分だった。夕食のアナウンスがあるまで二人とも無言でいた。

夕食のあと、真一郎さんが持ってきてくれたショートケーキを食べた。生クリームのかきと苺の酸味に混ぜて、妙なしょっぱさがあると思ったら、勝手に涙があふれていて、一

一緒に食べていたからだった。

これがぼくが三十路になって初めての五月十八日、遙佳の誕生日、しょっぱいショートケーキを食べた日のこと。

第二話 — マントヒヒと一緒にスワンに乗った日 —

👉 69 ページへ つづく